



Designing  
the spontaneous city

東京が持つ  
都市の魅力  
「創発的な  
アーバニズム」で  
ボトムアップ型  
な文化を育む

東京という都市について研究・分析された論文や書籍は多くあります。そのなかで、路地空間や横丁といった個別の都市の特徴を一つの特徴として捉え直し、ボトムアップ型で生まれる秩序を「創発的アーバニズム」という観点から分析したのがホルヘ・アルマザンさん（慶應義塾大学）です。アルマザンさんの著書『東京の創発的アーバニズム』では、昭和のノスタルジーと評価されてきた横丁や雑居ビル、高架下建築、暗渠ストリート、低層密集地域を都市デザイン分野から再評価すると同時に、そこに集う個人や事業者らによるボトムアップ型なアーバニズムにこそ、他の都市の参考になれる都市の魅力や文化を育む空間が生まれると分析しています。

一方、東京ならではの価値や文化が、都市再生特別措置法などの規制緩和を通じた大規模な企業主導型の都市開発によって失われつつあるとも指摘します。「企業主導アーバニ



ズムが東京に広がるなか、創発的アーバンズムにこそ都市をより活気あふれ自発的なものにデザインできる」とアルマザンさんは話します。



アルマザンさんの著書は英語版でも出版されており海外からの反応も多いとのこと。「日本は高層ビルのすぐ横に雑居ビルや横丁が混在する風景ですが、欧州ではゾーニングがしっかりしすぎている面もある。アメリカでは大規模開発を受け入れるか否かが二極的だったり。日本的なポトムアップ型のアーバンズムの魅力や価値がまだまだ伝わっていない部分もあり、その価値はまだまだ広がる余地がある」と話します。

Sam Holden



Jorge Almazán



Yukiko Osaka

を編み直す活動も行っていきます。活動拠点の一つが東京・北区の滝野川稲荷湯に隣接する、せんとうとまちが運営する稲荷湯長屋（本取材場所）です。

「銭湯は歴史的にも創発性と関連が深い。滝野川エリアは関東大震災を契機に各地から人が集まり、ポトムアップ的に都市化してきた。地域の発展とともに銭湯や個人商店が地域にいくつも生まれ、銭湯に通うことで回遊性が生まれ地域の賑わいを生み出した歴史がある」（サムさん）

**新たなまちのcommonsが創発を生み出す場**

創発的なアーバンズムを通じた東京の面白さに以前から注目し活動してきたのが、日本在住の翻訳家で東京文化資源会議の活動にも関わるサム・ホールデンさん。広島・尾道で古民家を改修し地域に開かれた場づくりを行うなど地域主導の創発的な活動に尽力しています。



また、サムさんは一般社団法人せんとうとまちの理事として銭湯の文化的価値を掘り起こしながら銭湯周辺の地域との関係

地域に開かれたコミュニティスペースとして運営しています。「地域の人達の持ち込み企画で運営されており創発的な場になりつつある。銭湯は昔から続くcommons、稲荷湯長屋のような場は新しいcommonsとして、住民主体で運営していける空間がまちにもっと生まれてほしい」とサムさんは語ります。

**スポーツが生み出す他者との紐帯**

スポーツとは競技スポーツよりも広義な意味合いで、都市の中にある道路空間や公開空地などを活用しながら、多様な人達がつながる装置としてのスポーツのあり方を模索しています。「例えば、今も続く集会場や神社の境内で行われる早朝のラジオ体操文化は、身体の運動だけでなく地域のコミュニティを作り出す機能がある。都市空間におけるアクティビティによって、他者とゆるくつながる機能があることは創発性を生むきっかけになるのではないか」（逢坂さん）



スポーツは他者とともにプレイすることが求められるものであり、他者との間で生まれるルールメイキングのために互いの理解や認識が必要となります。「自分が勝てるかもしれないし負けるかもしれないルールでゲームすることがスポーツの面白さ。ルールをその場に合わせ設定・調整することで誰もが参加できる余地が生まれる」ため、プレイすることで生まれる新たな出会いや偶発性など、そこにあるコミュニケーションが他者とのつながりや主体性を取り戻す場にもなっていくと逢坂さんは話します。

スポーツPTがこれまで取り組んできたもの一つに上野の仲町通り商店街の空間を活用した取り組みで、コロナ禍のGOTO商店街事業では上野公園と仲町通りをつなぎ、歓楽街の屋間の通りを活用した様々なアクティビティを展開してきました。プロジェクトを通じて、商店街で商売を営む人達同士の横のつながりも生まれるなどスポーツによって生まれる紐帯ができています。

逢坂さんの話を聞き、サムさんも「銭湯もスポーツも、サービスを受けるのではなく、場や機会を通じて能動的にコミュニケーションが生まれることで人は主体的になれる」とサムさんは話します。アルマザンさんは「欧州の多くの国では散歩をする習慣や散歩道が地域の至るところにあり、人々は美しい風景を見たり道沿いのカフェに立ち寄りたりする。スローな移動は人びとを健康にしながらまちへの主体性を持つきっかけとなる」と話し、散歩があるまちは地域のつながりにとっても地域経済にとっても価値あるものが生まれる、といった意見が各々から交わされました。



**創発性が都市の魅力を生む土壌に**

人との創発を生み出す、ほんのちよっとのきっかけや、他者とのコミュニケーションが生まれるような、そんな余白のある都市デザインによって豊かな彩りのある都市の風景が生まれてきます。

そうした風景は、行政や企業主導ではなく、地域に集う人達同士のゆるやかなつながりがあった人達がポトムアップ型のまさしく創発的アーバンズムによって生み出されていきます。人々が主体的に行動する・したくなるデザインをいかに都市空間につくっていくかが、都市の魅力を醸し出す土壌になっていくのです。

（記事構成：江口晋太郎 撮影：鈴木渉）

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。ここでは、東京文化資源会議に関わる様々な専門家や実践家の方々が考える、現在の東京、これからの東京について想像するための論考やエッセイをお届けいたします。

## 「地域のDNAは守られているか？」

Masami Kobayashi

小林正美(明治大学 教授)

普

段、大学で都市デザインについて議論し、地方都市でまちづくりの話をするとときにいつも主要なテーマとなるのは、地域のDNA（アイデンティティ）あるいは「らしさ」とは何か、という問いかけである。

即物的な議論からすれば、地域の特徴は、町並みの色彩、素材、スケール、道と町並みとの関係、などの総合ということになり、正確に分析統合すれば再現性に近い町並みができることが分かっている。しかし、さらに重要なのはその町並みににじみ出してきたその場で営まれてきた生活であり、文化である。そのことを忘れた、形だけを昔に戻してレトロな町並みを再建する手法はやはりテーマパーク的であり、決して好ましいことではない。

しかし、最近のまちづくりや景観政策では、コンサルタントに一任し、どこでも同じような景観計画を立て、規制型のまちづくりをする自治体が垣間見られるが、それだけでは均質的なまちしか生まれない。重要なポイントとは、そこに住み続けてきた人たち、新しく住み始めた人たち、行政マンなどが話し合い「こういう街がいいよね」という共有された将来ビジョンを持つことができるかどうかである。

例えば、私が30年間関わってきた岡山県の高梁市という城下町では、伝統的建造物群保存地区に指定される寸前の町並みが、将来の開発を予

測して住民が反対し、指定を中止することになってしまった。当時は古い町並みが大事であるという価値観はまだ希少であった。

その後、毎年学生たちと通ううちに、市民の中にも「歴史を生かしたまちづくり」への意識が醸成され、現在ではお宝を生かした高梁の町が、人口減少に耐えながらしっかり息づいている。

一方、東京という大都市では、震災および震災を経て歴史的建物はほとんど失われてしまったが、最終的にモザイク状の境界が形成された。谷中、神保町などはいまだに歴史的雰囲気をとどめ、神楽坂は震災で焼けものの、古い雰囲気はいまだに醸し出している。

一方、世田谷の下北沢地区は江戸の文脈を外れた新興の境界であるが、

早くから小田急線と井の頭線が交差して道路に依存する必要がなかったため、自然発生的な路地の街として発展した。ここに劇場やライブハウスが集まったため、70年代には若者が集まる街になった。

2004年頃から、その上に幅26mの都市計画道路を通す計画が発表され、大きな社会問題となったが、区長も変わり、結局一区間のみ事業化され、残りの部分は延期となった。セットとなっていた小田急線を地下化し踏切をなくす連続立体交差事業の工事が15年ぐらいいつづいたが、最近ようやく事業の完了を迎えた。

これまで約2kmに渡るオーブンスペースをどのように使うかという議論が長く続いたが、道路問題の時に反対した市民団体が、下北沢のDNAについて真剣に議論しあっていた経験もあり、様々なサークル活動が順調に展開して、今のまちづくりに反映されている。特に下北沢から世田谷代田にかけては気持ちの良い緑道が完成し、市民によるグループが自主的に植物の管理を行っている。このような事例は地方ではよく耳にするが、東京という大都市では極めて珍しく、いまだに見学が絶えないという。

路地を回遊する古い街の魅力と、緑豊かなウォークアブルなまちがうまくい形をかみ合い、現代的なQOL(生活の質)を上げるビジョンに繋がった良い事例となった。特筆に値するケースである。



東京のこれから  
フォーラムで  
議論重ねる

東京文化資源会議では2023年度からを活動の第二期と位置づけ、これまで以上に企業、自治体、NPO等との連携を強化しながら、活動の具体化・展開を図っています。

その一環として、本会議の支援者でありパートナーでもある賛助会員各社を対象にした勉強会・意見交換の場として「新東京ビジョンフォーラム」と題したフォーラムを定期開催し、新しいビジネスチャンスの発見、事業発想の転換、理念を具体化するためのプロジェクトの立ち上げ企画づくり等の場をつくることにいたしました。

6月に開催した第1回では「孔としての東京」を掲げる建築×敗者としての東京」と題し隈研吾氏と吉見俊哉東京文化資源会議会長との対談を行いました。その後、月一程度にて本

フォーラムは開催をしまいいりました。

第2回目は「スローモビリティと都市の価値向上」と題し、中村文彦氏（東京大学 特任教授）と中島伸（東京都市大学、東京文化資源会議幹事）によるスローモビリティ都市空間における移動や交通課題について意見を交わし、第3回目は「デジタル技術と精神文化が融合する時@秋葉原」と題し、岸川雅範氏（神田明神禰宜・近世近代神社祭礼研究）と、セマンティック・ウェブや参加型ウェブサービスに関する研究に従事している大向一輝氏（東京大学・人文情報学）らと精神文化にまつわる様々なデータを用いることで見えてくる新たな価値についてディスカッションし、第4回目は「東京の創発的アーバンリズム：大規模再開発に代わる漸進的成長へ」と題し、ホルヘ・アルマザンカバジェーロ氏（慶應義塾大学・准教授）をゲストに、横丁や雑居ビルといった都市空間で生まれる創発的アーバンリズムの可能性について意見交換し、第5回目は「都市空間におけるスポーツの展開可能性」と題し、スポーツを通じた地域コミュニティの可能性などについて高橋義雄氏（筑波大学・准教授）をゲストにディスカッションを行いました。

様々な観点から東京という都市のこれからについて語り、議論する場では、毎回、登壇者と参加者らによる活発な意見が交わされています。



以降も、第6回目、7回目と月一程度の頻度にて開催してまいります。様々なテーマにて最新の研究や実践者らによる報告をもとに、東京という都市の文化資源の未来について議論する貴重な場となっております。ぜひ奮ってご参加ください。詳細や次回のご案内等は、関係者向けのご案内メールをご確認ください。

編集後記

6月から始まった「新東京ビジョンフォーラム」は非常に刺激的です。最先端の現場で活躍されている皆様のお話を、少人数で「近い」場で聞いて、さらに意見交換もできる。このような場こそ、東京文化資源会議がご提供できる大きな利点であると思います。時代を先取りした考え方や取り組みは、すぐに世の中の仕組みを変えることには届かないかもしれませんが、しかし、既存の価値観では脱却できない閉塞感に陥っている社会を、生き方や思想から見直して次世代へのつなぎ方を見つけることに、大きな光を与えてくれるのではないかと感じます。ぜひ、みなさまもこの機会を活かしてみてください。（陸）

新型コロナウイルスも落ち着きを見せ、2023年は次第にオンラインでのイベントや大型のカンファレンスなども至るところで開催されるようになりました。やはり、人間同士のコミュニケーションにおいて、対面での意見を交わすことは、他者への理解や熱量など、単純な言葉のやりとりだけでは、ノンバーバルコミュニケーションも含めた総合的な対話であることを改めて実感いたします。新東京ビジョンフォーラムもそうですし、様々な場において、多くの人達との出会いや対話の場を楽しみたいと思います。（江）



[ティーチャ]東京文化資源会議ニュースレター No.21

活み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：波井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：鈴木渉 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2023年11月30日

〒110-0005 東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階 TEL：03-5244-5450 MAIL：info@tcha.jp URL：http://tcha.jp/

